

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

小説の中に描かれる「妬」：『妬記』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 妬記, 古小説鈎沈, 太平広記, 嫉妬, 中国古典小説 キーワード (En): 作成者: 安田, 真穂 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006236

小説の中に描かれる「妬」

～『妬記』を中心に～

安 田 真 穂

要 旨

『妬記』は南朝宋の虞通之が太宗の勅命によって撰した、女性の嫉妬にまつわる話を集めた書物である。本稿ではこれまで小説という観点から論じてこられなかった『妬記』を、その成立意義と「妬」を題材とした小説の流れから論じた。『妬記』に語られた女性の嫉妬は、実は夫への深い愛情ゆえの嫉妬であったことを読み取り、臨場感のある描写によって夫婦間の心の機微を巧みに捉えて描いていることを指摘した。そして『妬記』の出現以降、嫉妬によって殺された妾たちの復讐の念は、儒教道徳の圧力を受けない志怪小説という虚構世界で自由に表現できるようになる。家庭の中で秘されるべき「妬」は、こうして小説のテーマとなって語られ、唐宋代には更に別のテーマと絡み合いながら複雑で膨らみをもった虚構小説へと変わっていく。つまり『妬記』は、嫉妬を小説のテーマの一つへと昇華させ、「妬」が生み出す怪異を語る流れを作った、先駆的な作品であったと指摘した。

キーワード：『妬記』、『古小説鈎沈』、『太平広記』、嫉妬、中国古典小説

はじめに

中国における男尊女卑や一夫多妻制の文化の中で、女性の「妬」を抑えることは、家の中だけでなく、時には国家の安泰をゆるがすほどの大事に発展しうることと考えられていた。それは、中国の儒教的な考え方の中で、「孝」の第一である「子孫を絶やさない」ということに関係するからである。例えば『世説新語』巻三十五（惑溺篇）にみえる賈公閻の話では、後妻の郭氏はひどいやきもちやきで、ある日、乳母の抱いている息子を、夫の賈公閻があやしている様子を遠くから見て、乳母を愛しているのだと勘違いする。そして乳母を殺してしまうのだが、そのせいで、乳母に懐いていた息子が乳を飲まなくなり餓死する²⁾。こうして郭氏は、間接的にはあるが、嫉妬のせいで子孫を絶やしてしまったというのである。このようなことが起こらない為にも、女性に嫉妬をさせないように教育する必要があったのであろう。つまりは

『詩経』巻一（周南・螽斯）にいうように、「妬忌せざれば、則ち子孫衆多し。（不妬忌、則ち孫衆多也）」なのである。そこで女性に対して心得を教える、様々な女訓書が作られた³⁾。また、女性を離縁してもいい七つの原因の中に、「嫉妬する女性」が数えられていた。例えば『孔子家語』巻六（本命解第二十六）に「婦に七出と三不去と有り。七出とは、父母に順はず出づる、子無き、淫僻、嫉妬、悪疾、口舌多き、窃盜なり。（婦有七出三不去。七出者、不順父母出者、無子者、淫僻者、嫉妬者、悪疾者、多口舌者、竊盜者）」とあるが、「妬」はそれほど重大な問題であったといえよう⁴⁾。

しかし「妬」⁵⁾の感情は、女訓書などによっても容易に抑えられるものではない。「妬」にからんで起こされた事件は多く、それが語られ記録されて、やがて嫉妬の物語が生まれてくる。中国の儒教文化を背景に、嫉妬の感情は小説の中でどのように描かれることになるのか。「妬」にまつわる話を集めた『妬記』という書物が、南朝宋の時代に作られている。本論文ではこの『妬記』を入り口として、「妬」がどのように小説の世界に取り入れられていったのかを考えてみたい。

一、『妬記』の成立意義

『妬記』は『妬婦記』とも呼ばれ、南朝宋の虞通之の撰した書物で、晋代における女性の嫉妬にまつわる話を集めたものである。『隋書』巻三十三（志第二十八、経籍二）、及び『新唐書』巻五十八（志第四十八、芸文二）には共に、『妬記』は二巻本として記されている。しかし宋代以降の書目類には、『宋史』（藝文志）、『崇文總目』、『郡齋讀書志』、『直齋書録解題』などのいずれにも著録されていない。したがって、宋代ではすでに散逸してしまっていたようだ⁶⁾。現存するものは魯迅の『古小説鈎沈』に輯録されているが、わずかに七話を録するのみである⁷⁾。

撰者の虞通之は、南朝宋の会稽余姚（浙江省）の人で、易学に通じ、歩兵校尉や領軍長史、黄門郎などを歴任した人物であるが、その生没年を始め、詳しい事跡はわからない⁸⁾。虞通之が『妬記』を書き記した経緯については、『宋書』巻四十一（列伝第一、后妃伝）に次のような記述がある。

宋世諸主、妒に蔽ならざるは莫し。太宗毎に之を疾む。湖熟令袁愔の妻 妒忌を以て死を賜ふ。近臣虞通之をして妒婦記を撰せしむ⁹⁾。

この記述によると、『妬婦記』すなわち『妬記』は、宋の太宗（明帝、在位465～472年）の勅命によって撰された書物であったことがわかる。太宗は以前から臣下に降嫁した内親王達がみな嫉妬深い性格だったことを嫌っていた。しかも「妬」が原因で死を賜る者まで出てくる有様であった。そこで近臣の虞通之に女性の嫉妬の話を集めて書物にさせたというのだ。ここか

ら考えると『妬記』は、内親王を始めとする身分の高い女性たちに読ませる、教育書的な役割を担った書物であったと推測できる。

しかし、話の中の夫には威厳もなく毎日のように妻に叩かれ虐げられている者がいるし、妻の方も最後に心を入れ替えて嫉妬しないようになる者ばかりではない。いま、『古小説鈎沈』の配列に従って、現存する七話に便宜上、以下のような仮題を付けてみる。

- ①「李勢女」、②「曹夫人」、③「劉夫人」、④「武歴陽女」、
⑤「京邑士人婦」、⑥「庾氏」、⑦「諸葛元直妻」

内容を整理すると、①「李勢女」は、正妻と妾とが仲良くなることを描いた話、②「曹夫人」、④「武歴陽女」、⑤「京邑士人婦」は、女性の嫉妬を誇張し、ユーモラスな筆致で描いた話、③「劉夫人」は、妾を置かせない正妻に対し、周りの者が『詩経』を引用して妻の嫉妬をやめさせようとするが、夫人が逆に言い負かしてしまう話、⑥「庾氏」、⑦「諸葛元直妻」は、常に夫を監視し、夫の行動に制限を加え、体罰を加える酷い妻を描く話である。

このように、すべてが人物を描いた話であり、その人物描写には生き生きとした表現が随所に見られ、志人小説の代表的作品である『世説新語』や『俗説』と同様に、十分注目に値する作品であると思われる。そこで今回は紙幅の都合もあり、七話中でも比較的長い話であり、特に表現が豊かな以下の四話を例として、その描写に注日しつつ検討を加えてみることにする。

まず②の「曹夫人」は次のような内容である（日本語訳を示す）。

王丞相（王導）の妻の曹夫人は、非常に嫉妬深い性格で、王導を束縛して側仕えの者も置かせず、召使いでさえ検閲し、たおやかで美しい者があれば責め立てた。王導は堪えられなくなって密かに別宅を設け、たくさんの妾を囲い子供達も生まれた。のち陰暦の元旦の日、夫人が青疏台に登って遠くを見ていると、二、三人の男の子が羊に乗っており、みな身なりがきちんとしていてかわいらしい様子である。夫人は遙かに見ながら、この子供達を非常にいつくしみ、下女に向かって「お前はこれらが誰の家の子供か知っているかい。本当にかわいらしい」というと、お付きの者が正直にも「これらは四番日と五番日のおぼっちゃんです」と答えた。曹夫人は驚き、大いに憂え、我慢することができなくなって、車駕を命じて下男や婢ら二十人を率いて、手に手にナイフを持たせて、自らさぐりに行こうとした。王導もまた（このことを知って）急いで駕を命じ、手綱をとって門を出たのだが、それでもまだ牛がのろいことを心配し、左手は車の手すりにつかまりながら、右手に持っていた塵尾（大鹿の尾で作った払子）の柄で御者と共に牛を打った。うるたえながらも車を飛ばし、やっとのことで（夫人よりも）先に着くことができた。

（後日）蔡司徒（蔡謨）がこのことを聞きつけて、王導を笑い、そして彼の所へ行ってこう言った「朝廷があなたに九錫きゅうせきを与えようとしているらしいですが、あなたは知ってま

すか」と。王導はこれを信じて自ら辞退したい考えを告げると、蔡謨は「(九錫の内) 他
のものは聞いていませんが、ただ短い轅の牛車と、長い柄の塵尾だけだそうですね」と言
うので王導は大いに恥じ入った。

その後、王導が蔡謨を貶めて「私が昔、安期(王承の字)や千里(阮瞻の字)と一緒に洛
水のほとりて遊んでいた頃には、蔡充(蔡謨の父)に息子がいるなんてことは聞いたこと
がなかった」と言った。それは正に、蔡謨が前に言った戯れ言に怒っていたからである¹⁰⁾。

遠くから子供達を見ていた時には、とても可愛い子供だといとおしむが、夫の子供だとわか
った途端に、怒りに身を任せて別宅へ襲撃しに行く。夫に裏切られていたという現実を突きつ
けられた夫人の、抑えられないほどの感情が、「曹氏聞きて驚愕し、大いに恙^{うれ}へて、自ら忍ぶ
能はず」という表現に凝縮されている。また一方、夫が妻より先に到着するために用意された
のは、牛車であった。王導の慌てぶりは「猶ほ牛の遅きを患ひ、乃ち左手もて車闌^{すが}に攀り、右
手もて塵尾を捉え、柄を以て御者を助けて牛を打ち、狼狽^{うろた}奔馳す」という文からもよくわかる。
のろまな牛に腹を立て、すっかり狼狽した様子で自ら御者と共に牛を追い立てる王導の姿は、
非常に滑稽である。まるで、その日の夫婦の数時間を切り取ったような話で、非常にスピード
感とスリルのある展開だといえよう。全体的には、手に手にナイフを持たせて急ぐ妻に、牛車
に乗って追いつこうとする夫という、ユーモアあふれる描写によって、笑い話的な印象になっ
ている。

また、この話の最後の部分、王導が蔡謨を貶めた話は、『世説新語』巻二十六(輕詆篇)に
も同じ記載があり、当時の人々の間ではかなり有名な話であったようである。『世説新語』に
はこの最後の部分しか載っていないが、『妬記』が、王導が蔡謨を貶めるきっかけとなった事
件と、そのことで蔡謨が先に王導を嘲り笑った話を書き足していることに、『世説新語』との
記録の姿勢の違いがあるといえよう。そして更に、最後に「正に蔡の前に戯るるの言に忿^いるの
み」と、虞通之自身の解釈を文末に付け加えていることも、『世説新語』との大きな違いであ
ると指摘できる。

次に⑤「京邑士人婦」の話は、

都に、士人の妻で非常にやきもちやきの女性がいた。夫に対し軽くて罵倒、ひどいときには
必ず鞭で夫を打っていた。そして常に長い縄で夫の足を繋ぎ、夫を呼ぶときには、いつ
もこの縄を引っ張っていた。そこで夫は密かに巫のばあさんと計略をたて、妻が眠ってい
る間に厠へ入り、縄の先に羊をくくりつけておいて、自分は塀を乗り越えて逃げてしまっ
た。妻は目覚めて縄をひっぱると、羊がやってきたことにひどく驚き訝って、巫を召し出
してこの訳をたずねた。巫は「奥さんの数々の悪行をご先祖さまがお怒りになって、それ

で旦那さまを羊に変えておしまいになったのです。もしあなたが悔い改めるなら、祈ってあげましょう」と言う。妻はこれを聞いて嘆き悲しみ、羊を抱いて慟哭した。そして自分の罪を認めて悔い改めることを誓った。巫のばあさんはこの妻に七日間の潔斎を命じ、家中の者を老いも若いもすべて別の部屋にやっておいて、鬼神を祭って羊がもとの姿になるように祈り、夫はこのすきにこっそり家に戻った。妻は夫の姿を見て、涙を流し声をあげて泣いて言った、「何日も羊になっていて、辛いことはなかったですか」と。夫が「草がまずくてお腹が痛くなったことを今も覚えているよ」と言うと、妻はますます悲しむのであった。その後、再び妻がやきもちを起こしたので、夫は地面に四つ這いになって羊の鳴き真似をしたところ、妻は驚いて立ち上がり、はだしになって先祖の名前を呼びながら、もう二度とこんなことはいたしませんと誓った。それからは、二度とやきもちはやかなかった¹⁴⁾。

やきもちやきの妻を懲らしめる為に、夫が巫と相談して妻を騙し、嫉妬をさせないようにする話であるが、自分のやきもちのせいで夫が羊になってしまったと思った妻は、「婦因りて悲號し、羊を抱きて慟哭」するほどに後悔する。そして後半、妻は夫に「多日羊と作る、乃ち辛苦ならずや」と尋ね、夫への気遣いを見せている。しかも「猶ほ草を噉^{くは}ひて美^{うま}からず、腹中痛きを憶ゆ」という夫の嘘を真に受けて、更に哀しむ妻の姿は、前半に描かれていた「常に長繩を以て夫の脚に繋ぎ、且に喚ばんとすれば便ち繩を牽く」という彼女とは大違いである。すっかり心を入れ替えてしおらしくなった彼女は、その後もちょっと妬忌の情が出そうになっただけで、四つ這いになり羊の鳴き真似をする夫の姿に、はじかれるようにはだしになって飛び出し、先祖の壺に一心に祈る。その姿は、「婦驚き起ち、徒跣して先人呼びて誓を為す」という句によく表れている。夫を失うまいと必死になっている彼女の表情までもが看取できよう。

⑥「庾氏」の話は、

晋の泰元年間（太元、376～396年）に荀という姓の者がいた。妻は庾氏といい、とてもやきもちやきだった。以前、荀生が一晩帰ってこなかっただけで、二人の子供を殺してしまった。

家を建てても（荀生の）部屋を作らせず、客間はあったが後ろの壁を作らず、母屋から外の様子が見通せるようにしてあった。鬚のない人物はみな門をくぐることを許さず、手紙を届ける者の手ももし荀生の手に触れようとしたら、必ずひどく打ち据えた。もしも客と一緒に寝台に座ったならば、夫も客も共にひどい日にあった。

（ある時）近所の若者が突然に荀生の所へやってきて、彼と膝を接して座ったところ、すぐさま（庾氏）が大声で罵り、刀杖を持ってこさせる声が聞こえてきた。そこで荀生は客

に「常軌を逸した妻の行いは、君が聞き及んでいる通りです。帰らなければ、きっと妻は君をひどい目に遭わせますよ」と言うと、客は「私は畏れません」と言い、近寄って荀生の手を取った。庾氏は杖を持ってまっすぐ客に向かっていったが、客は立派な体格の上に、着物の中に短杖を隠し持っており、(それで) 庾氏をなぐりつけた。年老いた妻は抵抗する力もなく、その場に倒れ込み、客はそれを死にそうになるほど打ち据えた。荀生はその場から逃げ去り、(家に) 帰ろうとしなかった。妻は密かにあちこちと捜し回り、荀生に「先ごろ、狂人に遭ったことは、あなたの過ちではありません。だから、あなたはすぐに帰ってきてください」と伝えさせたところ、荀生はようやく出てきた。

(他日) 庾氏の兄がやってきて、荀生と一緒に寝台で寝ていた時、妻は(自分の兄だとは) 知らずに、すぐさまやって来て兄の頭をつかまえ、地面に引きずり下ろして殺そうとして、はじめて、それが兄であったことを知り、大いに恥じ入って部屋の中に引きこもってしまった。のちに兄は父の命だと称して、この妹を数百回杖で打ったが、それでも(庾氏は) 悔い改めることがなかった¹²⁾。

話全体を見ると、荀生が外泊した話、家を建てた話、庾氏が襲われた話、兄を殺しそうになった話と、四つの話が混在した印象である。ここでは特にその三日の話に注日したい。妻のやきもちは「凡そ鬚無き人の門より入るをえず」という徹底ぶりで、夫のそばに男女を問わず、人を寄せ付けたがらない。一方近所の若者は、荀生の制止を聞かず、『僕此れを畏れず。』乃ち前みて荀の手を捉ふ」という大胆さで、わざと夫人を怒らせ挑発しているかに見える。ここで読者は、この若者も夫人に打ち据えられるであろう姿を想像するのだが、その予想を裏切って妻は返り討ちにある。この展開が非常に面白い。そして夫人がその嫉妬心のせいで「即ち地に倒れ、客打ちて死に垂なんなんとす」という酷い日に遭ってしまうのは、嫉妬深い女性に対する教訓として、かなり効果的な内容であったろう。しかし話はここで終わらず、夫人は自分を見捨てて逃げた夫を必死になって捜し出し、「近ごろ狂人に遭ふは、君が過ちに非ず、君便ち還るべし」と言づてする。この妻の姿が実に印象的である。一見すると、これまで夫を束縛してきた妻が懲らしめられるという構図ではあるが、死にそうなほどひどい目に遭いながらも夫をかばい、離れたくない一心で夫を捜し求める、妻の姿を読みとることができよう。単に社会的に妻という立場を守る為ではなく、夫を深く愛しているからこそその嫉妬であることを窺わせているのである。

最後に⑦「諸葛元直妻」の話は、

諸葛元直には劉氏という妻がいて、非常にやきもちやきだった。いつも元直を杖で叩いていたので、(ある時) 元直は痛みに耐えられず、ほんの一二回手で打たれた所をなでると、

そこを妻が誤って打ち、指の関節が腫れ上がってしまった。それからはきまりを作って、いつも杖で叩く時は常に、両手に認跗（^{まが}服を作る時に使う針の類）を握らせていた。たまたまある時、元直は、服を作ろうと思って認跗を持っている妻を見て、自分が杖で叩かれるのだと思い、真っ青になって怖がった。それを見て妻が「これは違うわ。私が自分で服を作ろうと思ったのよ」というと、夫はうれしそうに喜んだ¹³⁾。

いつも杖で夫を叩いていた妻が、ある日、間違っ^て夫の指を叩いてしまう。普段杖で叩くのは気にしないのに、叩かれて腫れ上がった指を見て可哀想に思ったのであろうか、「此れより制を作り、杖を与ふる毎に、輒ち両手をして各おの認跗を捉えしむ」と、両手に「認跗」を握らせて叩くという決まりを作る。杖で叩くこと自体はやめずに方法を変えているところが面白い。そして後日、妻が認跗を持っている所を見て、また杖で叩かれると思った夫は真っ青になって怖がっている。妻が「不なり、此れを捉えて自ら衣を成さんと欲するのみ」と答えたのを聞いて、「乃ち欣然たり」と叩かれなかったことを喜んでいる夫は、何とも威厳がない。この妻は夫を気遣っているのかいないのか、非常に微妙であるが、読者の目から見ると、妻を怖れ一喜一憂する夫と、泰然自若とした妻のコミカルなやりとりが、非常に笑話的な要素を含んだ表現になっているといえよう。

このように『妬記』の話はいずれも短編であるが、人物の描き方が非常に生き生きとしており、殺伐とした「妬」をテーマとしながらも、その根底にある夫婦の愛情を垣間見ることがができる。話の中の妻は皆、ひどく非情で、夫を束縛したり傷つけたりもするが、その行き過ぎた行為は、実はすべて夫に対する愛情ゆえの行動であり、夫に対する深すぎる愛情が引き起こしてしまっていたことがわかる。『妬記』は、現存する話数は少ないが、人物のエピソードを描いた小説として見れば、一定の評価をすることが可能であろう。家庭内の瑣末な出来事とも言える話を、夫婦間の機微を巧みに捉えつつ、時には面白く、時には残酷に描き出しており、捨てがたい魅力を持っている。

また中国小説史の観点から言えば、それまでは、妻の性格をうまく制御出来ない夫は世間的にも非常に恥とされたために、それほど小説の中にも話題となることはなかった。それが、皇帝の命によって作られた『妬記』の登場によって、「妬」をめぐる問題が、家庭内で秘されるべき事柄であったにも関わらず、小説のテーマとなっていくことは、それ自体が、社会的価値を得たこと、注目に値することを表していると言えよう。つまり『妬記』は、小説の分野に、「妬」という新たなテーマをもたらすきっかけを作った作品なのである。

家の中だけに抑圧されていた「妬」の感情は、まずは志人小説の中で一つのテーマとなり、そして次に怪異を語る小説の中で、水を得た魚のように自由な発想で花開いていく。次章で、

その展開を追ってみたい¹⁴⁾。

二、「妬」を題材とする小説の流れ

六朝のいわゆる志怪小説は、人々が日常生活の中で体験した不思議な出来事を書き留めておこうとしたことに始まったが、唐代になると、次第に筆者が創作意図をもって作り上げていくようになる。こうした小説の流れの中で、嫉妬をめぐる話はどのように変化するのであろうか。

人間の妬心は抑えきれぬものではなく、その上、夫の家柄よりも妻の家柄の方が上位であることもしばしば起こったために、実家の権勢を笠に着て夫につらくあたる妻や、婢妾をひどくいじめめる妻が多かったようだ。正妻によって虐待され、時には殺されてしまった妾達も少なくなかった。婦徳に縛られ、かつ非力ゆえに抵抗するすべもなかった女性達に、復讐の場を与えたのが、志怪小説であり伝奇小説なのである。志怪小説では、殺された婢妾達は自らの言葉と行動によって、正妻に復讐し、懲らしめる話が作られている。また夫に裏切られた正妻の妾への復讐、自分を捨てた男に対する女の復讐、亡くなった前妻の再婚した夫または後妻への復讐など、現世での様々な怨念が物語を生み、現実には成し得なかった無念の思いを、小説の中で晴らしていくのである。

例えば、次のような話がある。今あらすじのみを挙げると、

後魏末、嵩陽の杜昌の妻柳氏は非常に嫉妬深かった。夫の昌が金荊という婢に髪を整えさせただけで、柳氏はこの婢の両手の指を切り落としてしまった。すると柳氏も指に悪性のできものができて腫れ上がり、両手の指が爛れ落ちてしまう。また昌が、玉蓮という名の歌の上手な婢を褒めたので、今度はこの婢の舌を切り落とす。すると、柳氏の舌が爛れてきたので稠禪師に懺悔したところ、禪師はすでにこのことを知っており、「夫人の嫉妬のせいでこんな事になったのです。過ちを悔い改めれば治るでしょう」と言う。そして禪師に呪文を唱えてもらおうと、七日目に口の中から一尺以上の蛇が二匹でてきた。その蛇が呪文によって地に落ちると、舌もまた元通りになった。このことがあってから、柳氏は二度と嫉妬しなくなった¹⁵⁾。

婢の指や舌を切り落としてしまうような横暴な妻は実際にもいたのであろうが、話の中では婢への行いの報いが、妻にも跳ね返って同じ目に遭っている。両手の指がすべて爛れ落ちてしまうのも恐ろしいが、「二蛇の口より出でて、一尺以上なる有り」という様子には慄然とする。

この妻が報いを受けたのは現世であったので、全体に怪奇な話となっているが、舞台が異界へと移行すると、より物語的な要素が加わり、話に膨らみが増していく。

例えば「盧弁」の話は、次のようなあらすじである。

盧弁という者が、夢の中で二人の黄色い服をきた官吏に召し出され、城壁で囲まれたある場所へ連れて行かれる。判官に出迎えられ、屋根はあるが梁のない部屋へ連れて行かれると、柱の下に大きなひき臼が十ほどあり、ひき臼のそばには数百人の女性がいた。ひき臼は常に回っていて、十人ほどの牛頭卒が大きな箕で女性をすくっては、ひき臼の穴の中へ入れていた。ひき臼が回るに従って骨肉は粉碎し、痛みに苦しむ声は聞いていられない程であった。盧弁はその女性達の中に伯母を見つけ、互いに悲喜し、ここへ来た理由を尋ねると、伯母は「妬忌の罪に座してここにいるのだ」という。そして伯母の頼みで、いつも持ち歩いている金剛経を試しに誦んでみると、ひき臼の回転が止まり、罪を受けている者は少しの間休むことができた。そこへ牛頭卒がさすまたを持ってやってきて怒るので、伯母がここにいることを告げると、「伯母が大事なら連れて帰れ」という。そこで伯母を連れて走って城を出て帰り、それぞれ生き返った。蘇生してから数日後に伯父を訪ねていくと、伯母が手をとって出迎え、「お前に会わなければひき臼の中に入れられていたよ。今再生できたのは、お前の力だ」と言った¹⁶⁾。

言うまでもなく、盧弁が夢の中で連れて行かれた場所は冥界であり、目の当たりにしたのは地獄の様子である。この話では妻が報いを受ける場所が、地獄へと移行しており、「磨は恆に自から転じ、牛頭卒十余、大箕を以て婦人を抄ひ、磨の孔中に置かば、磨に随ひて出づ、骨肉は粉碎し、苦痛の声、聞くに忍びざる所なり」という、仏教の地獄絵図でも見ているかのような、恐ろしい光景が展開している。嫉妬の罪の重さを言うだけでなく、地獄が如何に恐ろしい場所であるかという点にも話の重点が置かれているのである¹⁷⁾。話の舞台を冥界に変えたことで、話に膨らみがうまれ、「妬」は主題から話の一構成要素へと、その役割を変えていけると言うことができる。

更に唐代中期の伝奇小説では、嫉妬深い妻による妾殺しという題材は、他のテーマと結びついて、新たな発展をみせている。一例として「韋諷女奴」のあらすじを示す。

唐の韋諷があるとき庭で草刈りをしていると、地面から人の髪がでてきた。もっと掘っていくと頭と身体があらわれ、すっかり掘り出して、しばらくするとその婦人は語り始めた。自分は韋諷の祖父の女奴で、正妻に妬まれてここに生き埋めにされたのだという。死んだ後、冥界の役所へ連れて行かれ、自分からは正妻のことを訴え出なかったのだが、冥界の役人は（正妻に）殺されたことを知っていて、正妻の寿命を十一年分削って自分に与えるという判決が下った。しかし、この判決を下した冥官が別件で罰せられ、職を退くことになったので、自分の案件は九十年間も放っておかれたのだという。そしてそれが突然昨日、道士のような格好をした天官が現れて、自分たちのように判決後もまだ冥司に留まりおかれている者の判決が一斉に行使され、自分は再生する事が出来たのだという。韋諷が「ど

うして身体が腐ったりしていないのか」と尋ねたところ婢は「まだ裁判の結果が行使されていない人に対しては、地界の責任者が葉で身体を養ってくれているのだ」と答えた。その後、この婢が冥界のことを何でも知っていたので、韋諷もまたすべてを悟り、「身を慎んで徳を積めば、天は必ず福を下さる。神仙の道に励むべきだ」と常々言っていた。数年後、韋諷も婢もどこへ行ったのかわからなくなってしまった¹⁸⁾。

この話の婢は「某亦た敢へて娘子を訴へず」と、婦徳を備えた人物であることを表している。また冥界の役人は「某の命は未だ合に死すべからず。娘子の妬むに因り、理に非ずして強殺さるるを以て、其れ娘子の十一年の禄を減じて以て某に与ふと断ず」と、現世で起こった事を全て知っていて、判決を下している。このような再生譚によく見られる冥界観が、構成要素として加えられていることがわかる。しかも妬によって殺された婢の話でありながら、後半部分は冥界での裁判や冥吏の様子に重点が置かれており、最後は神仙譚でよく見られる、「数年後、諷と婢の在る所を失ふ」という展開となっている。このように「妬」にまつわる話は、再生譚、神仙譚と結合することで話がより複雑になり、読者に与える印象を強めているのである。「妬」というテーマが、構成要素の一つとして定着した上で、別の新しいテーマと結合していくことによって、より社会性が高まったと見ることもできるだろう。

このように「妬」を題材とした小説は、志怪小説の流行に伴って、嫉妬によって命を奪われた者が復讐するという怪異を含んだ内容の話へと変化していく。そして時代が下ると、現実世界で叶えられなかった思いを、架空世界で実現するという目的をもって話が創り出されていく。そして、更に再生譚や神仙譚などと組み合わせられてより長編になり、物語としての膨らみが生まれるようになるのである。

唐代にはこの他にも、身籠もった妾を殺して報いを受ける妻の話、前世の因果話、死んだ妻が墓中で子供を産む話や、幽霊が負債の返済を求める話などと組み合わせられた、より一層憎悪にまみれた陰惨な「妬」にまつわる話があり¹⁹⁾、「妬」をめぐる話がどのように発展していったのかについては、更に多くの話を分析していく必要があるだろう。それについては稿を改めて論じていきたいと思う。

三、結語

常に、男性の日というフィルターを通して描かれてきた女性の妬心は、男性の行動を束縛する邪魔なものであり、且つ家の存亡をも揺るがすやっかいなものと認識されていた。だから男性にとって都合のよい女性、つまり嫉妬の念を表には出さず、表面上は従順貞節を守っている

女性像がよしとされた。しかし実際には古代から嫉妬する女性は大勢いたために、漢代以降は『女誡』などの女訓書が数多く作られた。ただ、文字として記録されたのは地位の高い女性の「妬」のみであり、それも歴史という形での記録であった。すなわちこの時期には、「妬」はまだ家庭内の問題に過ぎず、他人が語るべきものではなかったと思われる。ところが南朝宋の時代に、太宗の命によって撰された『妬記』が出現したことにより、「妬」は家庭内で秘されるべき事柄から、より社会性をもった小説のテーマの一つへと変化したのである。

『妬記』は怪異を含まず、実際に起こったであろう出来事に即して記されており、一見すれば可哀想な夫に酷い妻という構造である。しかし、嫉妬によって引き起こされる非道な行為の中にも、深い愛情が潜んだ作品であることを、本稿では明らかにした。そしてその描写は非常に臨場感があり、中には笑話的に描かれた話もあることがわかった。まだ人物のエピソードに留まってはいるが、夫婦の心の機微を捉えた巧みな表現が随所に見られる、価値のある作品集であるといえよう。

この『妬記』が世に出てから以後、当時の人々の興味は次第に人間そのものの行為から、人が体験した怪異へと遷っていった。もともと「妬」にまつわる話には人の死に絡んだ部分があったので、この志怪小説の流行とともに、「妬」を題材とした話にも怪異的な内容を含むものが登場してくる。婦徳という儒教的道徳観念のために抑制されていた嫉妬や憎悪の念は、小説という虚構の世界の中で自由に表現できるようになったのである。そして更に唐宋代へと下るにつれて、「妬」は小説を構成するテーマの一つとして、別のテーマと絡み合いながら、より複雑でふくらみをもった虚構小説へと生まれ変わっていくのである。

つまり『妬記』は、嫉妬を小説のテーマの一つへと昇華させ、「妬」が生み出す怪異を語る流れを作った、先駆的な作品であったと指摘できる。なお検討すべき点が多いが、一つの問題として提起したい。

注

- 1) 『孟子』卷七下（離婁上）「不孝に三有り、後無きを大と為す。（不孝有三、無後為大）」とあり、「集注」では「礼に於ひて孝ならざる者 三事有り。謂ふところは、意を阿て曲從し、親を不義に陥るるは、一の不孝なり。家窮しく親老ひ、禄仕を為さざるは、二の不孝なり。娶らず子無く、先祖の祀を絶するは、三の不孝なり。三者之中、後無きを大と為す。（於禮有不孝者三事。謂阿意曲從、陷親不義、一不孝也。家窮親老、不為禄仕、二不孝也。不娶無子、絶先祖祀、三不孝也。三者之中、無後為大）」とある。
- 2) 原文は「賈公間の後妻郭氏は醋だ妒なり。男兒有りて名は黎民、生まれて載周なり。充外より還り、乳母 兒を抱へて中庭に在り、兒 充を見て喜び踊る。充は乳母の手中に就きて之れを鳴る。郭は遙

かに望見し、充乳母を愛すと謂ひ、即ち之れを殺す。兒は悲しみ思ひ啼泣し、它の乳を飲まず、遂に死す。郭は後終に子無し。(賈公閔後妻郭氏酷妒。有男兒名黎民、生載周。充自外還、乳母抱兒在中庭、兒見充喜踊、充就乳母手中鳴之。郭遙望見、謂充愛乳母、即殺之。兒悲思啼泣、不飲它乳、遂死。郭後終無子)」である。

なお『太平御覽』卷五二一(宗親部十一、乳母)にも同じ話がみえる。『太平御覽』では郭氏は黎民の死後にもう一人息子を産むが、黎民の時と同じように嫉妬して乳母を殺したせいで、この息子も死んでしまったという話が追加されている。

- 3) 女訓書の側から女性の「妬」について考察を加えたものとしては、林香奈氏の「賢ならざる婦とは——女訓書に見る家と女」(『ジェンダーからみた中国の家と女』、二〇〇四年二月二十五日発行、関西中国女性史研究会編)。この他にも同氏による「「妬婦」考」(『言語文化論叢』第五号、二〇〇一年、金沢大学外国語教育研究センター)や、「「妬婦」考補説——恐妻家の記録」(『言語文化論叢』第六号、二〇〇二年、金沢大学外国語教育研究センター)などがある。
- 4) 「妬」を慎むだけでなく、女性には「四徳」と呼ばれる徳を備えることが求められた。これは婦徳(貞順)、婦言(辞令)、婦容(婉婉)、婦功(糸紵)の四つをいう。漢の班昭の『女誡』(婦行第四)に「女に四行有り、一に曰く婦徳と、二に曰く婦言と、三に曰く婦容と、四に曰く婦功と。…清閑貞静、節を守りて整齐、己を行ふに恥有り、動静に法有り、是れを婦徳と謂ふ。辞を扱ひて説ひ、悪語を道はず、時然る後に言ふ、人を厭はず、是れを婦言と謂ふ。塵穢を盥洗し、服飾鮮潔、沐浴時を以てし、身は垢辱ならず、是れを婦容と謂ふ。紡績に専心し、戲笑を好まず、酒食を潔斉し、以て賓客を奉ず、是れを婦功と謂ふ。此の四は、女人の大徳にして、之を乏しくすべからざる者也。(女有四行、一曰婦徳、二曰婦言、三曰婦容、四曰婦功。…清閑貞静、守節整齐、行己有恥、動静有法、是謂婦徳。擇辭而説、不道悪語、時然後言、不厭於人、是謂婦言。盥浣塵穢、服飾鮮潔、沐浴以時、身不垢辱、是謂婦容。専心紡績、不好戲笑、潔斉酒食、以奉賓客、是謂婦功。此四者、女人之大徳、而不可乏之者也)」とある。
- 5) 人をうらやんだり、ねたましいという感情に対して、一般的には「妬」以外に、「嫉」「媚」「忌」などの言葉も用いられるが、それぞれ混同して用いられることも多く、すべてを総括するものとして「妬」を用いることもある。また「妬」には「妒」という異体字が存在するが、便宜上、引用の部分は原本の記載に従い、論述の中では「妬」を用いることとする。
- 6) 『宋史』卷二百六(藝文志)、『郡齋讀書志』卷第三下(小説類)、『直齋書録解題』卷十一(小説類)には王績の『補妬記』が著録されている。それぞれ『宋史』卷二百六(志第一百五十九、藝文五)には、「王績『補妬記』八卷」とある。『郡齋讀書志』卷第三下(小説類)には「『補妬記』一卷。右、古に『妬記』有り、已に之を亡ひて久し、何人の伝記中より輯むるかを知らず。婦人の敵妬の事、以て亡を補ひ、商周より唐初に至る。(補妬記一卷。右占有妬記、久已亡之、不知何人輯傳記中、婦人嚴妬事、以補亡、自商周至于唐初)」とある。更に『直齋書録解題』卷十一(小説類)には「『補妬記』八卷。京兆の王績の編と称す。何時の人なるかを知らず。古に宋の虞通の『妬記』等有りて、今伝わらず、故に之を補ふ。商周より下、五代の史伝に迄、有る所の妬婦は皆之に載り、末は神怪雜説文

論等に及ぶ。最後に妬の治する二方有りて、尤も笑うべき也。(補妬記八卷。称京兆王績編、不知何時人。占有宋虞通之妬記等、今不傳、故補之。自商周而下、迄於五代史傳、所有妬婦皆載之、未及神怪雜說文論等。最後有治妬二方、尤可笑也)」とある。

また『唐書』卷五十八(志第四十八、藝文二)には、王方慶の『續妬記』五卷」という著録もみえるが、これも散逸してしまっており詳細は不明である。

- 7) 『藝文類聚』卷十八(人部二、美婦人)や卷三十五(人部十九、妬)にも『妬記』からの話を引いているが『古小説鈎沈』本とは文字の異同が多い。『太平廣記』が『妬記』を出典としている話は、後ろで仮題をつけた⑤「京邑士人婦」(注10参照)だけである。また、『太平廣記』卷二七〇「盧夫人」の原文に「按ずるに『妬婦記』、亦た夫人有り。」とあるが、盧夫人は唐代の史に在した人物であることから、この『妬婦記』はここでいう『妬記』とは違うものである、ここではとらない。
- 8) 虞通之の経歴については、『南史』卷七十二(列伝第六十二、文学)に「(虞)通之、(虞)觥は皆、会稽余姚の人なり。通之は善く易を言ひ、歩兵校尉に至る。(通之、觥皆會稽餘姚人。通之善言易、至歩兵校尉)」とある。また『隋書』卷三十四(経籍志第二十九)に「『善諫』二卷、宋の領軍長史虞通之の撰。(善諫二卷、宋領軍長史虞通之撰)」とある。また同じく『隋書』卷三十五(志第三十、経籍四)に「宋の黄門郎『虞通之集』十五卷。(宋黄門郎虞通之集十五卷)」とある。
- 9) 原文は、「宋世諸主、莫不嚴妒、太宗每疾之、湖熟令袁愔妻以妒忌賜死、使近臣虞通之撰妬婦記」である。同様の記事が『南史』卷二十三(列伝第十三、王誕伝)にもあるが、「太宗」は「明帝」に、「以妒忌賜死」は「以妬賜死」に、それぞれ文字の異同がある。
- 10) 原文は、「王丞相曹夫人、性甚忌。禁制丞相不得有侍御、乃至左右小人、亦被檢簡時、有妍妙、皆加請責。王公不能久堪、乃密營別館、衆妾羅列、兒女成行。後元會日、夫人於青疏臺中望見兩三兒騎羊、皆端正可念。夫人遙見、甚憐愛之。語婢云、『汝出問此是誰家兒。奇可念。』給使不達旨、乃答云、『是第四等諸郎』曹氏聞驚愕、大恙、不能自忍、乃命車駕、將黄門及婢二十人、手持食刀、自出尋討。王公亦遽命駕、飛轡出門。猶患牛遲、乃左手攀車闌、右手捉塵尾、以柄助御者打牛。狼狽奔馳、方得先至。蔡司徒聞而笑之。乃故詣王公、謂曰『朝廷欲加公九錫、公知不』王謂信然、自叙謙志、蔡曰『不聞餘物、唯聞有短轅犢車長柄塵尾爾。』王大愧。後貶蔡曰『吾昔與安期千里共在洛水集處、不聞天下有蔡充兒。』正忿蔡前戲言耳」である。ここでいう九錫とは、天子が勲功ある諸侯に特に賜った九種の品物で、車馬・衣服・楽器・朱戸(赤く塗った門戸)・納陛(昇降が外から見えないようにした階段)・虎賁(冠にやまどりの羽を挿し、宿衛を司る官位)・鈇鉞(おのとまさかり)・弓矢・秬鬯(祭祀に用いる酒)を指す。この九錫は、やがて帝位を譲るつもり的人物にその準備として賜る習慣があった。
- この話は、『妬記』の中で唯一『太平廣記』の中に卷二七二「王導妻」として収録されており、比べてみると文字の異同が多い。また『藝文類聚』卷三十五にも採られており、やはり文字の異同がある。
- 11) 原文は、「京邑有士人婦、大妬忌。於夫小則罵詈、大必挨捶打。常以長繩繫夫脚、且喚便牽繩。士人密與巫媼為計、因婦眠、士人入廁、以繩繫羊、士人緣牆走避。婦覺牽繩而羊至、大驚怪召問巫。巫曰『娘積惡先人怪責、故郎君變成羊。若能改悔、乃祈請。』婦因悲號、抱羊慟哭、自咎悔誓師。媼乃令

七日齋、擧家大小悉避於室中、祭鬼神師、祝羊還復本形。婿徐徐還、婦見婿啼問曰『多日作羊、不乃辛苦耶』婿曰『猶憶噉草不美、腹中痛爾。』婦愈悲哀。後復妬忌、婿因伏地作羊鳴、婦驚起、徒跣呼先人為誓、不復取爾。於此不復妬忌」である。この話は『藝文類聚』卷三十五（人部十九、妬）にも採られており、文字の異同はない。

- 12) 原文は、「泰元中、有人姓荀。婦庚氏、大妬忌。荀嘗宿行、遂殺二兒。為屋不立齋室、唯有廳事、不作後壁、令在堂上冷然望見外事。凡無鬚人不得入門。送書之人若以手近荀手、無不痛打。客若共牀坐、亦賓主俱敗。鄰近有年少徑突前詣荀、按膝共坐、便聞大罵、推求刀杖。荀謂客曰『僕狂婦行、君之所聞。君不去、必誤君事。』客曰『僕不畏此。』乃前捉荀手。婦便持杖直前向客、客既大健、又有短杖在衣裏、便與婦、老嫗無力、即倒地、客打垂死。荀走叛不敢還。婦密令覓荀云『近遭狂人、非君之過、君便可還。』荀然後敢出。婦兄來就荀、共力牀臥、而婦不知、便來捉兄頭、曳著地欲殺、方知是兄、慙懼入內。兄稱父命、與杖數百、亦無改悔」である。この話は『藝文類聚』卷三十五（人部十九、妬）にも収録されており、同じ内容である。
- 13) 原文は、「諸葛元直、妻劉氏、大妬忌、恒與元直杖。不勝痛、纔得一兩、仍以手摸、婦誤打指節腫。從此作制、每與杖、輒令兩手各捉認附。元直遇見婦捉認附欲成衣、謂當與己杖、失色怖。婦曰『不也、捉此自欲成耳。』乃欣然。」である。『藝文類集』（卷三十五）にもこの話は採られており、少し詳しい話になっている。
- 14) 『妬記』では息子を殺してしまう正妻の話はでてくるが、妾については殺そうとするだけで、後章で論じていくような実際に妾を殺した話は、現在残っている『妬記』には見あたらない。散逸した部分に、そのような話があったかどうかまではわからないので推測に過ぎないが、ここでは、妾を殺す話はあると避けられ集録されなかったのではないかと、という可能性だけ指摘しておきたい。
- 15) 原文は、「後魏末、嵩陽杜昌妻柳氏甚妬。有婢金荊、昌沐、令理髮。柳氏截其雙指、無何柳被狐刺、螫指雙落。又有一婢、名玉蓮、能唱歌。昌愛而歎其善、柳氏乃截其舌、後柳氏舌瘡爛。事急、就禪師懺悔。禪師已知、謂柳氏曰『夫人為妬、前截婢指、已失指。又截婢舌、今又合斷舌。悔過至心、乃可以免。』柳氏頂禮求哀、經七日、禪師大張口呪之、有二蛇從口出、一尺以上。急呪之、遂落地、舌亦平復。白是不復妬矣。」(『太平廣記』卷一百二十九「金荊」)である。出典は『朝野僉載』巻二で、そちらでは「禪師大張口呪之」の部分「禪師令大張口呪之」となっており、意味がよりはっきりする。
- 16) 原文は、「盧弁者、其伯任湖城令、弁自東都就省。夜宿第二谷、夢中見二黃衣吏來追、行至一所、有城壁。入城之後、欲過判官、屬有使至、判官出迎。吏領住一舍下、其屋上有蓋、下無梁、柱下有大磨十枚、磨邊有婦女數百。磨恆自轉、牛頭卒十餘、以大箕抄婦人、置磨孔中、隨磨而出、骨肉粉碎、苦痛之聲、所不忍聞。弁於衆中、見其伯母、即湖城之妻也。相見悲喜、各問其來由、弁曰『此等受罪云何。』曰『坐妬忌、以至於此。』弁曰『爲之奈何。』伯母曰『汝素持金剛經、試爲我誦、或當減罪。』弁因持經、磨遂不轉、受罪者小息。牛頭卒持又來弁所、怒曰『何物郎君、來此誦經、度人作事。』弁對曰『伯母在此。』卒云『若惜伯母、可與俱去。』弁遂將伯母奔走出城、各歸就活。初、弁唯一小奴同行、死已半日、其奴方欲還報、會弁已蘇。後數日、至湖城、入門、遇伯設齋。家人見弁、驚喜還報、伯母

迎報其手曰『不遇汝、當入磨中。今得重生、汝之力也。』(『太平廣記』卷三百八十二)である。出典は『廣異記』となっており、文字の異同はない。

- 17) 冥界の官吏や裁判の様子などについては、拙稿「文言小説における再生譚に関する一考察——『太平廣記』を中心に——」(『中国学志(泰号)』、平成八年十二月十四日発行、大阪市立大学中国学会発行)を参照。
- 18) 原文は、「唐韋諷家于汝穎、常虛默、不務交朋。誦習時暇、緝園林、親稼植。小童薤草鋤地、見人髮。鋤漸深、漸多而不亂、若新梳理之狀。諷異之、即掘深尺餘、見婦人頭、其肌膚容色、儼然如生。更加鍬錘、連身背全、唯衣服隨手如粉。其形氣漸盛、頃能起、便前再拜。言『是郎君祖之女奴也、名麗容。初有過、娘子多妬。郎不在、便生理於園中。託以他事亡去、更無外人知。某初死、被二黑衣人引去、至一處。大闕廣殿、賁勇甚嚴。拜其王、略問事故。黑衣人具述端倪、某亦不敢訴娘子。須臾、引至一曹司。見文案積屋、吏人或二或五、檢尋甚鬧。某初一吏執案而問、檢案、言、某命未合死。以娘子因妬、非理強殺、其斷減娘子十一年祿以與某。又經一判官按問、其事亦明。判官尋別有故、被罰去職、某案便被寢絕、九十餘年矣。彼此散行。昨忽有天官來搜求幽繫冥司積滯者、皆決遣。某方得處分。如某之流、亦甚多數。蓋以下賤之人、冥官不急故也。天官一如今之道上、絳服朱冠、羽騎隨從、方決幽滯、令某重生。亦不失十一年祿。』諷問曰『魂既有所詣、形何不壞。』答曰『凡事未了之人、皆地界主者以藥傳之、遂不至壞。』諷驚異之、乃爲沐浴易衣、貌如二十許來。其後潛道幽冥中事、無所不至。諷亦洞曉之、常曰『修身累德、天報以福。神仙之道、宜勤求之。』數年後、失諷及婢所在。親族於其家得遺文、紀在生之事。時武德二年八月也。」(『太平廣記』卷三百七十五)で、出典は『通幽記』である。
- 19) 例えば、『太平廣記』卷一百三十四「李明府」(出典は『報應錄』)のように、夢に命乞いに現れた婦人は、じつはその日に料理された白羊で、更にその羊の前世は、その家の正妻であった。金品を盗んだと偽って、身籠もった女僕を殺した罪によって死後白羊となり、子羊を宿したまま殺されて食べられてしまう、という話などがある。また、宋代の『夷堅志』にも嫉妬に狂って現世に現れてくる鬼の話があり、それについては、拙稿「『夷堅志』の再生譚についての試論——現世に近づく冥界——」(『日本アジア言語文化研究』第5号、大阪教育大学日本・アジア言語文化学会、平成十年三月三十一日発行)を参照。

(やすだ・まほ 国際言語学部助教授)